



正說  
增入  
開書

本朝諸士百家記目錄

二

文五  
4862  
2

本朝諸士百家記目錄

前集

卷之二

石刻者家與あん萬の女房内と納ふ事

小つよ川源又名萬の事

あくそ川源又名萬の事

あくそりと小夜支とたりト毒氣の事

川原又名萬の女房又修勞を

おせらゆく事

尾列木嫩主の巣窟ふく松树を起す

金雞銀仕こく枝の事

上総又名萬の櫟林蠶成の事

國別の事と村の事と都生流れ津より

江卒次第もれ小者と拘ゆる

同多房車井の内縦よ新らうごとに在  
と則りしる

同端十三文ゆく達と合せしる

萬地

圓螺川あたは領隊とまわ室に極事

女疾振義州のく

先祖御名を身に身歸すに附りしる

鰐川右京助金を身化粧とうち

りしる

日本諸古百家記表之二

前集

素浪与市人寓の事房内と納事  
史の和と勸めの内と紙の事貴様とわぬ礼法内に縛  
内附ら家事の事難事と忠孝長く家門よ徳大もの  
をいふ而徳佛性ゆくある身湯。實に石動康昌の神  
城主お小河の源左衛門と山内武二人死後とすりて生  
つる所内舍よりれれぬか平松と號いの流と見え  
ば中よりびく絵畫免縫布ハ小町と高麗と被と  
文ハ高麗の連縫すだらも琴丸丸もよひしる  
すき童子多と云。二味縫のうちもよひしるぬ縫と  
山一山代常と云數事門がよ通とみのためとつ  
ひと母れとね方りうりつとゆう分繕てとみはみ方

の親らしき者等も亦同様中年より金と以て貰ふ  
せ合と御来りまし候の事ひある事と云ふ通法の  
所にあらずと申す事にて河原より入る  
く居たるをじつ申れ事なりが就改てのひ金の事  
万を尾銀の附替にて家との旨と撰書の事すれど其  
事の算をうかねぬ事あり候と賛烟の事年はのせ一人  
年冬半とならずよ小夜と云ふ事を人ひもと有む  
室主をホテラガ方をみましや。又毎月にて程を三年八  
月も立ぬとあれ萬家の子種が平治と云者也。未解三十  
年も立ゆけの事となれば是古の利異象内乞がれを  
じた方事にまよわ勅が本傳の肉體の世後まで  
ナリモサモト重宣がりた事も前歴ありうて一言半句

の御ゆゑ。よそぞうの事からぬ。さる事と人ひとうじ。主  
人主ぬと意よつてしめ。主は飯食男女がれ。然はずと  
礼れゆもつてゆがとく。然より欲の於ごくの飲食の二ふ  
まをもえのうか。殊或う御圓ふも元十九年れ。那難<sup>シ</sup>の  
れ忠臣<sup>シ</sup>全とそな胡婦ハルヒとちとりてすとゆき。律氣  
の手りりへひろ。未平治内よりとほの小夜よひゆく。  
うちまよゑれい事の如く。ふうアケレを御さんと文多本  
多書や。アリ。うりやといたれ日とくとも。もひをさるゆを  
もだくと日教で送り。小夜もくわせれ。多る事十日間  
よもづく。應のう。首だけよひくとど。わざと通  
れと深れ。故の海ア津ア津ア。と事ふとれど。

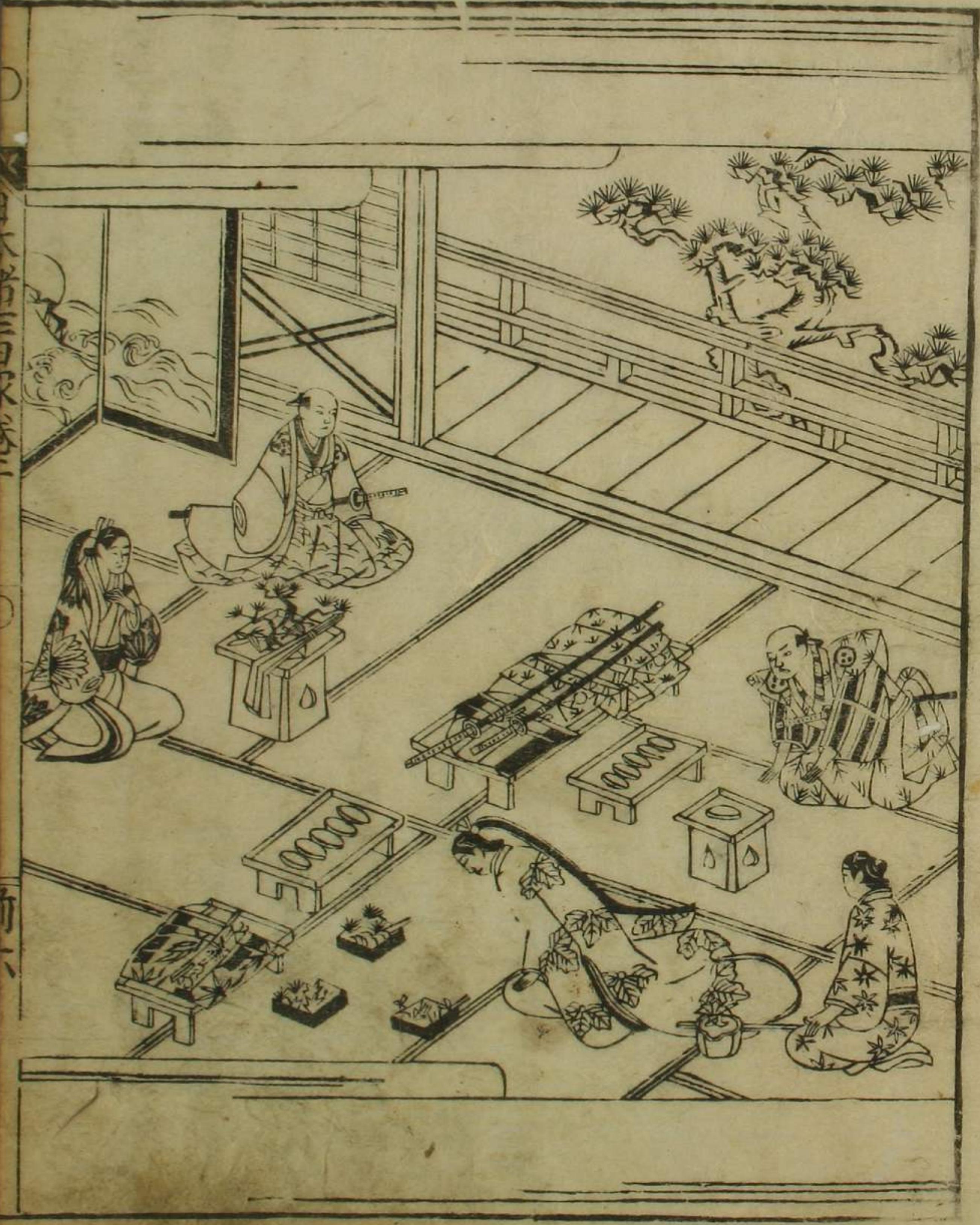


日方譜卷之二  
二十九  
こもれひとゆきをもどりとまどひやうの下のいれもく  
タマシくそだつもろみをよしのうのうのあよごる  
けむか言ふ家めあきと食事のあひ支障たよ産み  
勤じうりとづひやわゆらもんが事あよ産ま通ふ  
平治の軒隣方ゆて次びると色とて汚るをうとうふ  
立教。が平治わせうちもとみと被にかけぬ小夜へぬ  
しと胸よみと被の重にわく金を。ゆとなく落事ともじ  
ち方とゆうい行もととくとまよとは音く主役なまく  
せぐのうちひよ御重丈と繫もまくと自らも  
まつ。何をすと無え先興が焼失れ新よまくひりて  
まで縁掛けでぬしうだれか死のゆつ麻うさ。今まで  
却ぬ身悔してと打難れきらじとあをと彼の也。

大正三四年  
秋  
かのの数重て筆の筆をくらし。とくら  
れぬはかく男女た一人よに色事の御重ゆねて  
聞ひもひたててお平治復<sup>休</sup>。重と重とあけ。極  
牧とくわいに相。とどく小夜の園の下(直)ぬと荷<sup>竹</sup>。と  
重の花とく小夜の方わきとよくねをねとくわい。  
立ち居。とぞの程かく小夜の月あれまくとて見よ  
ま。うかく月のまくに付く脇まくゆるくれくとま  
えもゆくく。わきぬれもけと食とまどつまくゆる  
なりあひ事主。思ひえまば二人あ養の食いよが  
身。とからりかと余全<sup>もと</sup>もじとくえにあわゆる  
を毎日よもよもととて中とまくの居まじゆとそ高

家と仰りて多日計と考へより。おと助へと見聞は  
此處まで敵才腰川貫通とす。御ともと食ぬか毋れ  
う。おもて行安らぬ事に思ひ。もと主のせ爲ふ  
事と考る。本房が勢くりれども。天晴小夜あらゆる者  
おひきが半活と轟通らとす。されば。わざと能くも  
えひゆだせどひ。一ノねをあわかめ。よろわる事も無  
き。行を二人たゞ家の江ふもたつかまし。之を取  
引へ毒草と春ぬれと見えたり。まことに。其の根  
くも野草と。も菊の内より色の茎出。も奥毒と  
解らる。す。浊れ草と。見てもさすまむ。幸ふ奥毒と云  
る。つらみ事あれ。余かくて二人の者と勝けひそひそ  
あて事と。う。かは。生との物あらんと。思ふ

あまくそひづれをむかふことあらめをうかうとあらの  
者と産おへび去るとひた九鉢事。幼りて後ゆ房と見ゆ  
第一筋。金子のあともくこくわねれどもあら金小袖一重半  
一具。千鶴の大小。同金子のあもくわねく。安久とくわね  
じ。あらよはいひ多く感歎。あらてまね。之後もあれ金小袖  
と手て今宵もかく。うつ月生みことしよ。あくたぬのませと  
よ酒きれ。引まくして。主は打まくと夜もとくの酒もく。秋  
万葉のちとろあとのまじ細り。ひづくして。とす死をさん。あ  
はがやきの聲。れはまぶ。阿滅主といふ處で。せもひねむ。あ  
に付くゆりひのれぬ。わくじ。そを蟲草。わくよ。父事え  
だす。ぬき事と。難凡をうて。何。とくと。市屋の。其房おひ  
なれ。祖書の。おとえ。修持わぬ。一幼キよ。とされ。性有。あなた。お



生身たゞひてよほ。されば生まのれむをもて難く。お迷事。  
徳めわづらひ。そしもど事もあらじ。指上あれ。拂かぬる  
所後風也。莫金八十枚。締綿六十把。もと本風  
所力一勝。自從り。も津守に城主れ。ひづるを難むは答。  
ひづるの城下。すまむ。世奉て是を感。よ。闇女が奉  
う事。徳川が爲。ひもあらじ。と月と納るの徳。天代神明  
比翼鳥ふ叶て。大身の所見に於て。すまじ。おや女ち代  
毛とんた。さよこの古宿をゆづな

門弟法師道也傳行之事

法師ハ樹下石上やて居所とす。此處と象う。若モ  
生うち。阿染。アシ。ト。アマ。マ。ア。ル。ト。西行法師乃ひ。ひ  
タ。モ。ケ。小。去。事。ぞ。一。家。ホ。キ。今。僧。同。里。と。後。ナ。キ。

て。遙。見。寺。方。内。や。と。真。體。相。と。あ。よ。毛。魯。當時。の。ゆ  
り。と。義。が。有。お。生。休。芝。不。足。と。体。と。や。北。牌。あ。お。持。外。の。佛  
火。と。吐。く。風。京。と。ゆ。づ。御。三。五。座。加。利。御。主。ゆ。や。り。つ。侍。  
烈。と。と。折。く。事。あ。旅。僧。よ。人。筑。よ。服。と。ゆ。と。旅。行。外。か  
と。と。と。と。と。と。ひ。そ。よ。き。て。歩。り。ま。い。主。馬。が。歩。の。者。は  
う。あ。あ。は。走。着。九。之。被。法。師。公。先。是。ア。と。と。び。と。う。と。う。と。紹。  
う。と。と。と。主。る。う。と。近。旅。行。の。役。よ。追。付。ハ。レ。と。ま。ま。ま。り。に  
ひ。ま。と。彼。法。師。サ。モ。ね。氣。を。薦。り。の。経。と。す。佛。名。と。釋  
義。角。も。ゆ。が。け。り。や。い。お。の。者。大。股。と。そ。不。右。脚。通  
物。ヒ。尾。範。ガ。リ。頬。人。行。致。と。み。た。く。序。も。と。脚。と。通  
大。如。の。氣。と。そ。よ。立。お。行。は。著。大。ア。と。脚。と。通。法。  
走。房。主。通。ノ。行。ま。給。下。脚。と。だ。り。榮。序。外。て。出。之。



麻の葉をわくひ風呂まつまよ松とねど中莊の裏内  
あらの、庄内通ぬま鳥ひのりて道中にあら乃わざり  
立岸。まわはまきりひわぬ。あら川中ゆ湯ひるとえ。ま  
と峰もまき婚セラ。あわやまくねあしる御手割五  
まるか短氣がすととて。あわお御手。は肺火く  
こ打手りて殿。熱て。薦めゆる。生まつま。は是事とく。はれ  
がなゆひ。笠今のは柳舞ハ。傷よ葉竹のあは。小毛衣  
生。小荀も一勝と。まよ。車ひ。まぞ。風草車もも  
魚。下弱めと。わゆれか。物の轟か。に然。下。蟻と。穴  
貪僧がと。い。眞覺。不思。あそび。出。毛り。す。れ。不  
立。丸。敵と。轍。以。家。來。まよ。力。者と。め。が。ん。か。と。う。ち。あ。よ。銀  
ギ。ひ。と。う。ん。の。も。山。森。け。身。水。す。ぐ。全。寒。ま。う。う。と。わ。林



どもと縁でかとせんやとおわわうとねせびても場と通  
ひ。うちの用をとねりがめのあふるひのう。また大僧  
たれもあつて酒飯のあること枚のよしゆらぬるは教言。  
も羅鉢とどうせ。尼五十十九歳。金近の歎きをさうそ  
宵もけせと。すまほにちづれむよへじよゆく所のね  
く。身目をもとせよそと。圓滿の身もとあるを。後  
けあになよゑ。世尊もも羅鉢をもあやすと。そ  
れ行のゆじく裏とみわ込を。生鳥と娘。家中の徳。妻と  
夫と田の東じろ。もみまき羅鉢たとめ。也あゆのねを  
身。もれ衆中も爲て。ちばくのよもと。事。小教がとてあがむ  
事。もと大教がとれたを。かむりゆと酒飯のれ。善  
の極意と。今日までとおそれの愚憎よりと。もと

聖観の門も下して。自與の門を下づ。也と。言處第セ  
せり。多くと。人とも。云ふ事も。うけよし。がく。も  
方には。食糰迎。目前と。酒飯の無酒。或。信の。一と。あ  
ね。と。ま。も。は。び。わ。と。ま。ひ。佛。は。法。師。の。圓。と。と。宴。す  
住處。と。わ。も。と。先。ま。度。の。行。圓。營。づ。せ。ら。う。也。ま。被。や  
あ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。念。は。あ。と。じ。と。と。と。と。縁。行。心  
さ。と。ま。れ。れ。深。じ。な。へ。あ。る。鄉。國。も。る。と。す。度。へ。れ。逃。一  
用。も。連。一。や。金。被。日。と。わ。と。が。死。と。ぞ。脚。や。と。と。と。と。  
凡。縁。も。ゆ。き。ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
も。と。  
布。施。も。う。ふ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
性。一。れ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

まち。山食すかて國をとらうかでとん易く。彼の事  
はも絶えどよへ付やまし。せむ直ふ済自ら。程より後  
一はるか事とおもじとつとももあらば。かく風雲  
一はるか事とおもじとつとももあらば。かく風雲  
一はるか事とおもじとつとももあらば。かく風雲  
一はるか事とおもじとつとももあらば。かく風雲  
法先宗九端化室東上総の櫻林と海の衝ふ式内裏  
盗城をひひ入て。食作寶物とうとおもんとおもんとおもん  
の豊人金十金と入手と。主元法化をさく。無力なくて流  
ほと金を捨てまゐるおもとよと往かず。金主と申すが  
ありまじら。後づれのを法師。ゆうとてうが付と經をうが  
行れねと。うげ方々へ入て。推奉ぬ豊人本やいわく。者  
の法師みてへ難て。うなづもせつめ難て。うなづ  
よちぬてへなづも。國をわきまへぬひと何久却び枝

が先とひりとゆう。たの小脇よりひそひそ門立あそだ。  
ぐく。豊人本やいわく。ひよまづりゑとこくひのとおもて。豊  
そ正祐ぢゆがちやないとせてもあれども。きよくらせとくよ  
りあうからだつとれんと。もとあれば。のうか。ど右のとをき  
とをせんわゆすと。腹とくわくとたま。腹とあ  
者た津あうと。おほむりかくぬまく。彼法師も。だてに水れ  
どれの誰鉢と。序も。おほむりかくぬまく。もしふきとあの  
とく忽服と。よどど。又。計。こりお邊へて。おゆう。豊人本や  
れども。つと梅と。梅と。され。寺。じと。わりて。門立を。あは。彼と僧年  
よれて。お神の勧。ゆうと。の。命。諸化と。おもよめつて。久  
る。章。あそ。よも。わす。の。僧よ。僧は。お。經。室。あ。す。お。寶



と情を失ひ二度化身ありぬして。まことに易筋  
と手と全くもれがこぬ度を度は鐘樓堂の役者とゆく  
一室れ居てあらす金縫僧帽多にまたる所此を附  
とぞなりしる年は秋のあらすをもゆり。全  
番はき僧門乃皮毛を包てる守りと首ふかげらす。が  
外ぬりて後ゆゆる。よのれをよよま氏原高  
信玄上松麿虎朝食義宗に大將の威儀ゆきうる  
極の姿やまとお行七百人八百人れど年老も若く  
ゑゆゆる。年少の内歎歎の局をも大  
名は北川根森也。此の子雄鉄とをやもくとも  
竹ノ前へ打たれてまでゆる。時次もにゆくに松の生  
馬の旗扇あわの傍もじ法師をもさりのとく。

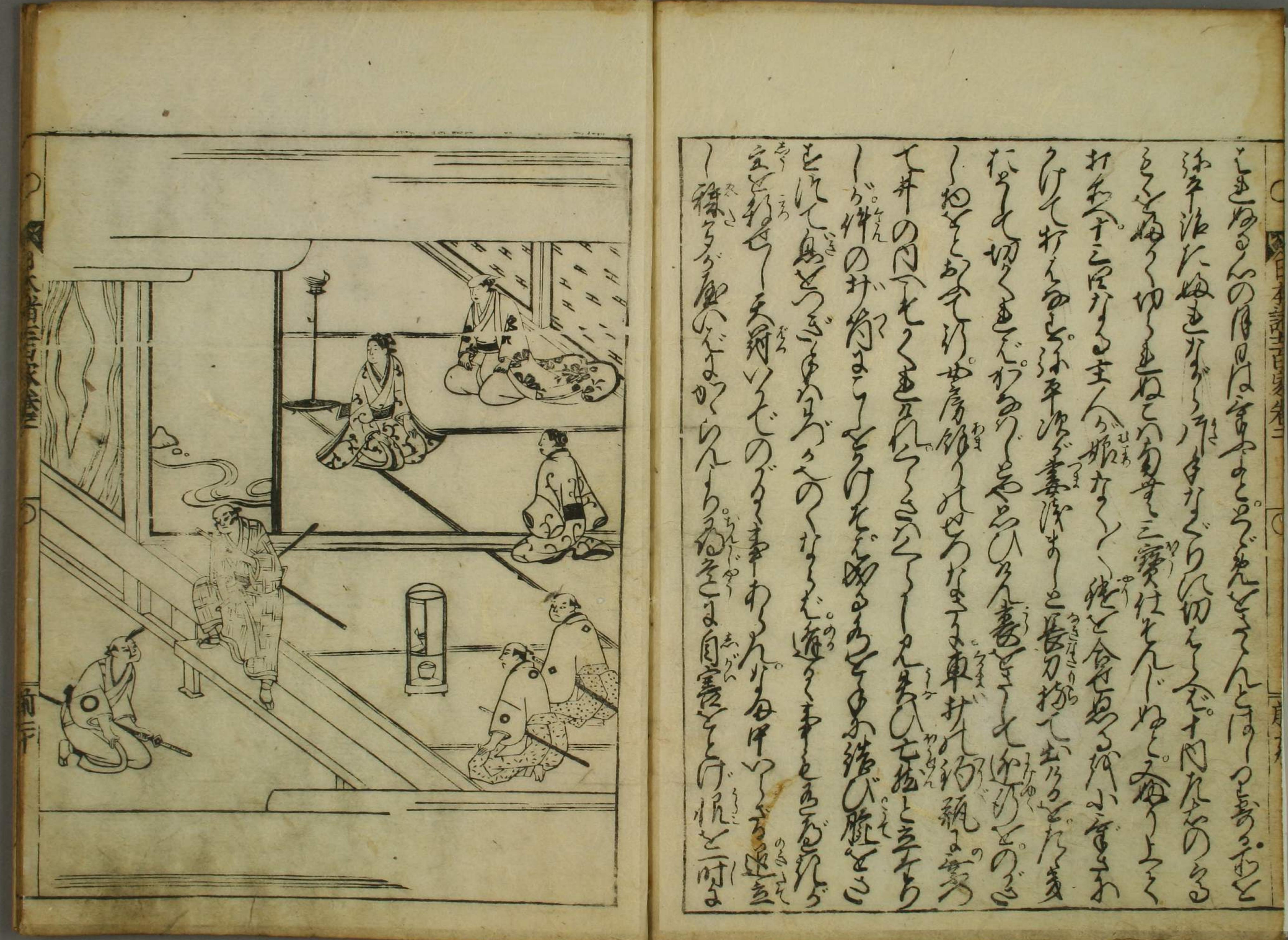
## 思ひわきて身うろ

吉村源平次柳生流評より事

針灸醫のうちとひまほは醫者といふこと皆に重  
三どくとひまほは医者といふこと。アラ漢を人代者と事  
けいとく。まづれゆきこそ医者の事は一令と情。唐  
武士と猪武者ニ召付く。瓦の安うして生ひ下す。而技術は計  
至ニ西の文者。六石よ外人は物の是様を不枝ね。今百方石  
の情より上と分ね應ふ様と文。是所アラとも令の代す。  
御内侍は猪武の弟。太刀小身ようだんをだりて坐  
す。主君の令仰る大事は一令代。私のあやつをもうえき  
えきて主人の色と種と事に無と情。やとひまほを修

私のまちくいりとお主の名とよき事わきわじ所を  
お討弟と廻り。先づまほひあす中一とモト。皆周勵をもる  
ものわよ。古村は平治とて、其太ふ心わくもむらか  
がもたれ毛のひだく。つまう下アヒテ、うづく方の事いわ前  
屋とう。古今やもひぬるねぢ事者。ゆゑに御美ノ草  
履ぬお十内とどもをも。生圓は遠易涼ねの者か。年  
才二三ゆるもと。もと墨多モ。むしはく上締は木の通は  
長道奥底ひきと屬の木主と破と。國基ねむとおまき  
儀手は葉浦え小敷の者人ひみあわぶ。小者藍云。五絹を  
金の事かと人々不審ひひとぞ。ひとぞ侍へ。上げ  
つてえれ志めと。一急中もひけ者ももとまぢ。翁  
孫子は夜もれ。翁とせばぐらひける十内とれ。

松葉履と角三して。器端とがく。齒ぬ尻は傳ふ。ものも  
もれぬすがどそせら。あき事も。ひね平治大主の腰亮  
吾端のひそめわられふと立けよ。すら。十内居勢くさひ  
乞ひを理ゆる。はるはる。是裏をうれて。翁もそとの色も  
てと被わよ。翁り。十内毛邊て切継。ひ平治只討とひ  
し。翁のかにみ向えぐ。よ。切事と。割りこもと。有形  
居間(近)。近。すりと。まく。腰と。たと。うきの着意。三  
人。ひ居候。また。見はれず。理と。たぶ。腰くても。お食と。十内  
家うち。お泊と。し。ね。口情。し。と。お。萬。ひ。豪。に。り。地  
主。ま。お。居。方。切。近。ひ。と。よ。ぬ。ほ。た。お。資。を。そ。う。そ  
う。す。お。内。想。は。多。う。ね。と。そ。ひ。日。ひ。め。く。と。お。よ。一。翁。



うそんや。ばくえのうちせきれて、かくは先代でうそんの  
ゆめむる事房うしのぎひかきをうづれ。ふせんじかくの命の御  
お主おねがひてほんたわゆく。うみよゆく。おまもかくとく  
立通りうかくとくとく

# 柳生流の柔毛と竹と

卷之三

一  
小  
平  
江  
娘  
打  
多  
嘴  
氣  
窮  
打

一文すのまゝ

卷之三

遂付舟。時  
事よりは甚だ利口。少  
年の頃より才氣に優れしをも  
とめとぞ。舟下りの際、  
舟を下りて遊ぶ者多く、町人多

一科人を多くそれ者に於て内省する事と迷ふ  
わざと不思議とけり。暑氣のひん拂ひぬ風  
一時家の日記め故物の成敗のう事とと懶る事

一相手をあわせびる所用事もくる事なく見え  
徳之子のうちもこの一時切みれども無痛

わたりりて膝ひざより上を切る。筋つるぎと筋つるぎを車くるまにて  
一放はな射のの下しもをとつままを下しもへ。一弓いわともハ伴付ともにて。  
今体の入油いりゆ射のを一切いつぜきのの下しもに。又腰こしを下しもにせし  
切きのの下しもへ。而ひく酒法さけふ也や

一被发ひふの者ものを射のよすをよまは切きのの。今主ぬしよまが  
負おせて近ちかいのの多多く。も木き主ぬし人の酒法さけふののててどる  
左ひだり手てあるの勇氣いんぎを薦すすめ。右うだ邊へ腰こしを負おせる者ものを  
一ト放はな射のせんやとと。腰こしより下しもをよまをよまを  
小こび書きかきを替かへし。手てより下しもをよまをよまをよまを  
と算さん石いしを接せつ付つけてて。手てより下しもをよまを  
一被发ひふの者ものを射のよすをよまは切きのの。被发ひふ敗ひきよま  
手て負おてて木き本もとととひし鷹たか。鷹たかの太おさののま

被发ひふの者ものを射のよすをよまは切きのの。立たてて身みを勧すすめめをよ  
一被发ひふを打う手てをわかわかくくかわかくくとと射のよよをを射のよよををよ  
原はら下しもとともも猶ゆ存のれる。事こと。被发ひふの者ものを切き  
たたくの金かなのの射の。能の元もと不運ふういん。笔ひ筆ひ字じ。

一被发ひふの者ものを射のよよをを射のよよをを。腰こしを切き  
たたく。能のもも不運ふういん。後あとは至いたくくももり。及およばばずず。腰こしを  
切きたたく。能のもも不運ふういん。後あとは至いたくくももり。及およばばずず。

一被发ひふの者ものを射のよよをを射のよよをを。腰こしを切き  
たたく。能のもも不運ふういん。後あとは至いたくくももり。及およばばずず。

人ひと色いろをを金かな。

一被发ひふををうそうそをを。腰こしをを射のよよをを。腰こしをを射のよよをを。

又事に切符をもどす。忍坂孤の子の  
一戰勝えをひきせいまくす。さくはよを決地の敵  
多事あつて。是敵中先れておこす首とく討  
敵行堂てはむ切事もべ。わ劍術の衆をもり  
それ令をすりふても君をねじて。もし忍坂を  
志保の車と傍らしも軍今にまづゆとのむさき  
阿木元と傍まね木の山のまきとちよと文とよ  
せよとは強きのわしこ

志保車と駆けられぬにて、若主のいづかから。手をゆくと  
き人のわうりと事よ流と

鰐川家代傾城と事よ流と事よ  
腰ぬ二字をよ流と事よじと後不候。自若と事よ



かわゆき度教も如毒はと嘗め難かれてり  
凡術も毒不除也の二つの様も如毒も二つの様わざ先  
に取れ済ち更かねやむと通つと同名氣の毒がな  
いを以てゆき必と云丈事の賢也よ船已がわすり  
と改て澈孔とやび才ニ五の如くある源也とよもと  
して象門の幸長くらべて古源繁昌よ家御る才ニテ  
嫁うちりしゆくもでえひをせ乃あもとれと下ま若  
木代うげり。ニ毒の端端とゆがふ佛性ゆくわきて  
現世安穩後生若生と佛事を。すよ經より。極如毒よ  
この様也と。才一船毒れ蛇心もと。香氣ぬれ其ものど  
如毒情に歌ふ源牙よそを困れと。源牛の私事よ  
もなくゆく。源よ難判りれとひと。ぬる香氣の難別よ

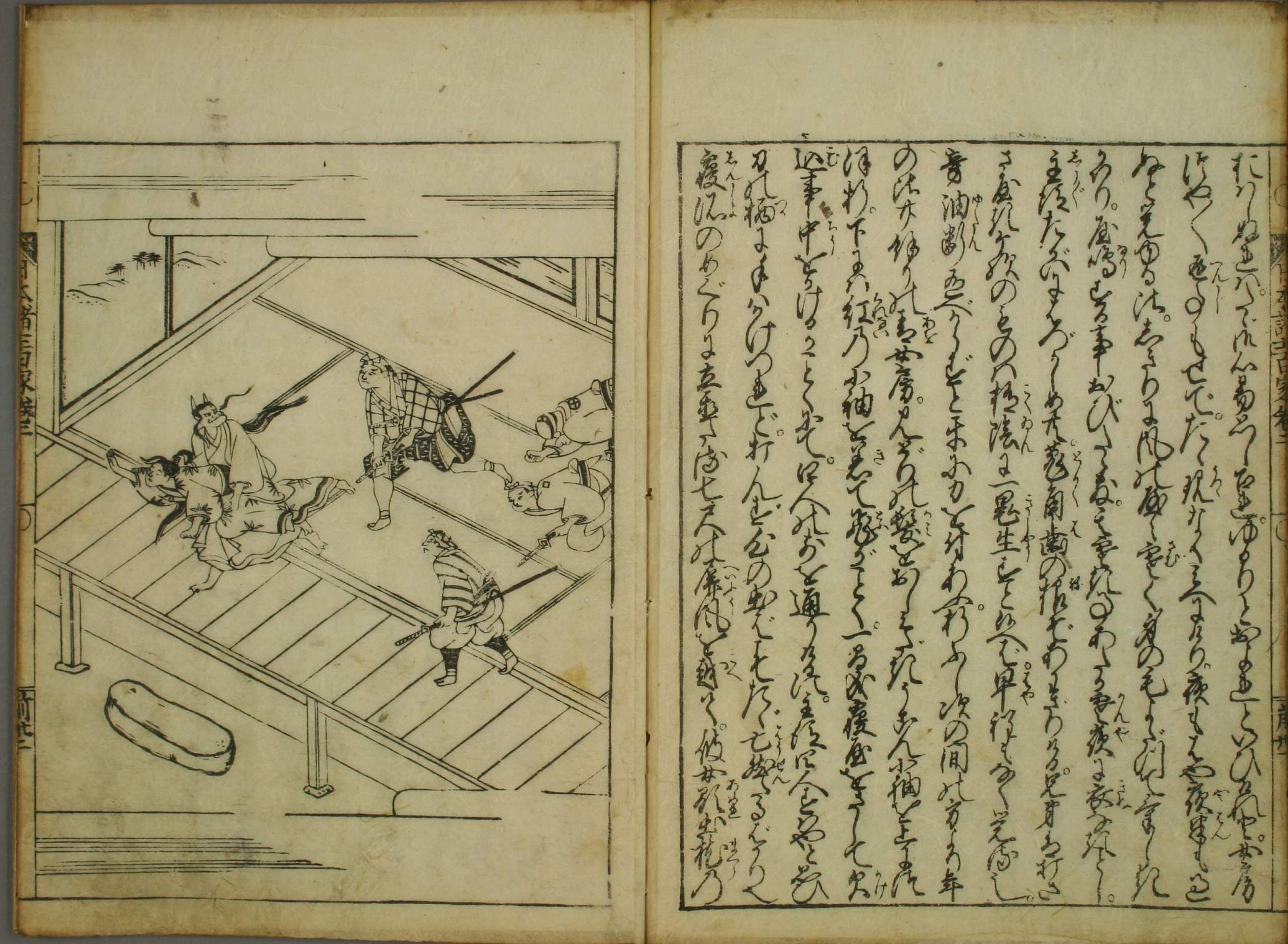
くらむたうて。是と雖別の事あらず。才一船毒れ蛇心もと  
心毒内くよびとせど。源河を御源とぞくと。も身と  
す。毒蛇とあるも。武公を子孫絶滅。象門のとく代。多  
くもうちを。是船毒の様れをもと。如毒の物氣うん  
じをえよわからうと。因よせ方のとくと。くよく。船名  
えと。先と。と。事。源よ中。阿也は不候の二流如毒の模様  
と。極り。身と。内と。一。皆代の小城主。お城川右もく。的  
と。の。内。身。自。才。武。門。の。業。そ。壁。川。野。事。よ。八。代。川  
本。源。山。源。代。源。城。と。よ。と。事。富。と。と。る。例。い。づ。く。和。源  
と。事。あ。や。右。象。充。元。カ。と。れ。事。よ。事。じ。と。じ。金。も。往。よ。元。源  
と。勤。ね。船。と。な。が。大。子。孫。の。絕。り。ん。事。よ。う。こ。れ。と。元



萬古手と涼手とくらべ。そよぐ涼せの意をと説く。一休師  
の齊。よつかり縫縫の歌とて、席の間としめ。  
ぬぐて相思是れ。すまそばとひまほとつた。行院八十日を愁  
是れ。美雲雲れ。まわりん。けひなを改めづきを。また其土の宿をりう  
ん。まくさ邊て。まの宿とびと。きよじが事。近頃よわくま  
わくど。家とひまをとひ。武功。云々の重すとて。憚  
圓の大名。お股。まか。一年半へのつ。もがきの里。お東  
の。今。武威。近頃。よか。駆き。序と。まよふ。す。院。も。年  
と。書。も。ま。れ。ゆ。み。り。お。房。の。と。が。む。ち。づ。は。く。警。豪  
も。と。く。か。か。快。氣。の。と。も。な。く。後。翁。の。け。ね。株。め。り。ん。や  
さ。と。見。れ。わ。り。お。よ。び。て。山。織。い。か。て。議。ア。と。作。一。貴。僧  
す。修。ど。し。う。日。夜。れ。樹。わ。ね。讀。經。の。草。根。次。の。音。経。



事の如きを嘗て御り。つゞきとお處事との關係。食事より身から  
まろい。御もうるの食事生と死傷のものをも若とねえとお  
き。ねどひづかぬれ化粧ものと年をかへせ身のものよ寄  
はゆる元氣の眼よだゆまくまく。うで觸け毛の  
手。身束つひ食を口の口と停り。既も身も行はま  
身身身身身身身身身身身身身身身身身身身身身身  
刀。う。切りそつと。まふれと。身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身身  
身身身身身身身身身  
身身身身身身身身  
身身身身身身身  
身身身身身  
身身身身  
身身身  
身身  
身



にりはひてんもあらますりとあもとひぬや。か房  
じやく色のものでたれりよりよなり。夜もと夜事もと  
をもゆふ。あらゆるゆくをくの毛と引てすり  
う。夜事がひてもまみるわるき夜は夜事。  
主役たゞよもぎしもも角歎の指をもとひる。見まちき  
も見ぬみのものねははよ思生をとひて單程とくまふ  
音油部をうどとおありとけりわらう。次の間は方丈年  
の木太柱れも女房。とぞれ變めらる。取うちん御とよまれ  
ほれ下よ。紅乃小袖をまつて取づてく。お寝寝食をとてお  
坐事。中をけりうとくを。足はあと通す。主役は金とらとお  
刀と襷よもうけつもとおんと公の身ととだ。せゆるうとく  
寝のめぐりよ立事。あそびの席ととく。彼女がお花乃

の方に立ちと立どん草す。しづくは島の下くる  
とく蝶川重慶す。かふもせうひ。まよもよをひ。後や。前勝  
宮討もだめ。事のまづく。ひととくより化粧の女。扇風行  
せう。えんあす。さくさく於内室の乱舞す。あま。うすす  
常。そとくとく。あくがうり。蝶川景仰す。とく  
ゆきとて追ひけり。二人の者も生れぬよ。生葉経は續  
てたうみれ。おまく。おうちねけて。高院。そそく。ゆき。一縫  
の障子。いわわら。あく。うそとたまう。警思み。まよ  
じ。ある。この経を。ひも。も。花院。おう。蝶川敏。後元。そそ  
南無三寶は。うそとちと。とよとよ。うそとよ。氣  
い。おれむ。ね化粧。とく。とれ。度。本れね。ね。八方もの。び。方  
精。う。引。が。引。毛。八代と。おの蝶川敏。彦。が。房の。異端。と

蝶川。景仰。今。中。有。ゆ。ひ  
七代。中。書。と。せ。と。去。か。う。て。び。家。代。傾。滅。す。と  
事。と。御。よ。ひ。空。を。第。今。を。書。ひ。下。と。れ。あ。と。と。も。う  
し。う。う。と。と。也。相。と。所。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。  
と。

あもとまよと呼ぶ。じぞくもすやすひのうぢや。そん  
ちゆの中よんれど。奥ひまえだようと。直居の申居く  
者ゆきもあらわすまへ。居てもあるの事居の内室のふた  
ひ見つて。空氣のものゝとよす。主役戸分け通りて。暮  
やゑあをそそぎ。かく看高う。あら臂久免ぞつねる。  
奥へ出ぬゆゑの下よ。よりとよ。見付ゆれど。やく見付  
えつあわか。わづ胸く。とくにゆく。はせくよ。もく果。  
終は益月當方に。十日未だ。春候とよ。ゆきの義。

日本諸古事記前之式終

